ふゆのそらの、ひこうきぐも

アベカズユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふゆのそらの、ひこうきぐも

【Ｎコード】
Ｎ４９４５Ｒ

【作者名】
アベカズユキ

【あらすじ】
朝からついてないことばかりの俺……。ふわふわと雲のようなキャンパスライフ。

（前書き）

投稿テストを兼ねて……。
数年前に、ふと思いつくままに書いたものです。
プロットも細かな設定もなし。
小説という形になっているかも危ういものですが、お読みいただけたら幸いです。

俺はふわふわと、そこに寝そべっていた。
今まで誰かと、何か話していた気がする。
誰と、何を話していたんだろう。
…思い出せない。

ピピピピピピピ……

…なんの音だろう？

ピピピピピピピ……

…鳥のさえずり？
だったら『ピピピ』じゃなくて、『チチチ』だろう？
『ピピピ』でも悪くはないが、『チチチ』のほうが適切だ。

ピピピピピピピ……

……なんだか知らないけど、うるさいな。

伸ばした俺の手が、何か固いものに当たり、その音が止んだ。
しばらく、静かな時間が続く。

そして俺は、はっと顔を上げた。

授業開始2分前。

それがその日、俺が教室に滑り込んだ時間なら、まだ良かった。
だが不運なことに、それはその日、俺が目覚めた時間だった。

「やっちまった。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

俺は駅の階段を駆け降りていた。
この駅のホームに向かう階段は、段差が妙に小さく降りづらい。

年をとると、このくらいの段差に有り難みを感じるのだろうか？
…というか、なんだこれは？
足をフル回転させているのに、体の移動速度がそれに見合ったものには思えない。

そんな下らないことを考えてるうちに、電車の扉は閉まりだす。

「おい！やべぇ！！」

俺が階段を降りきったところで電車は走り去ってしまった。

「くっそ……！」

俺はそのまま固いベンチに座り込んだ。
冬の寒さが突き刺る。

ダメだな、今日は。朝からツいてない。
まず何がいけないって、今日、初めに口にした言葉が『やっちまった。』だ。
それから『おい！やべぇ！！』。
次が『くっそ……！』。

今日はまだ悪い状況で発する言葉しか言ってない。
…じゃあ、こうしよう。
今日はまだ良くないことしか起きてないけど、次に言う言葉が『やった』とか『ラッキー』とか、
そういう良い状況で発する言葉なら、今日はこれから良い日になる。
そうなれば、そこら辺に１０円玉でも落ちてないかな？

それを拾って『ラッキー』と言ってやれば、俺の勝ちだ。

……いや待て。

１０円を拾っただけで『ラッキー』とか、なんと言うか、俺はそんな小さな男じゃあない。

なら、空を見上げて『いい天気だ』とでも言ってやろうか？

実際今日は腹立たしいまでに晴れている。

……たが、フェアじゃないな。

そうだ、もっとフェアにいこう。

今日のありかたを決める大事な場面だ。

ここは公正にいかなくては。

「よぅ！おはよ！！」

不意に背中を、力一杯叩かれた。

「いった！……あっ、くそっ！やっちまった。」

「お……な、なんだ？どうした？」

「あぁ、いや。何でもない。……おはよう。」

それは大学の友人だった。

勝負の４言目は『いった！』だった。

さらに『くそっ！』『やっちまった。』のおまけ付き。

多少の不可抗力があったとはいえ、勝負は勝負。素直に敗けを認め

るよ。
他人の所為にするのも大人気ないから、今日はそういう日なのだと諦めることにした。

「お前、この時間授業なかったっけ？」

…素晴らしい質問だ。

「あるよ。寝坊した。」
「あぁ、そっか。…お気の毒。」

そこへ丁度、電車が来た。
車内はまばらに人がいるだけだ。
この時間だしな。こんなものだろう。
俺たちは入って右奥のシートに腰掛けた。

空は相変わらず清々しく、そこに一筋の飛行機雲が奔っている。

「あれってさ、環境とかに悪いんじゃねぇの？」

急に友人が尋ねてきた。

「…何？どれのこと？」
「いや、あの飛行機雲。」
「なんで飛行機雲が環境に悪いんだよ？」
「なんか煙は環境に悪いイメージがある。シャトルの煙とかも。」
「詳しく知らないけど、シャトルは液体の酸素と水素を燃料にしてるから、水しかできないんじゃないの？」

「あれもそうなの？」
「いや、飛行機雲は煙じゃないだろ？」
「…じゃあ、なに？」
「雲だって。飛行機が通ると翼の所の気圧が下がって、周りの水分が液体化して、雲になるんだろ？」
「……よく分からない。」
「まぁ環境には悪くないから。安心しとけ。」

駅から大学まではあまり離れてはいない。
大学に着くと、俺は友人と別れ、教室に向かった。

後ろのドアから教室に入り、一番手前の席に着いた。
教授がボソボソと話しているが、どうも聞く気になれない。
最近なんだか疲れている。この時期だし、レポートも重なってくる。
昨日もレポートを書いていて、眠るのが遅くなってしまった。
俺は、俺と同じように頬杖を付いて詰まらなそうにしている奴らをぼんやり見ていた。

……今日の夢はどんなだったっけ？

俺はいつからかそんなことを考えていた。
夢なんて、すぐに忘れてしまうものだ。
夢に何か意味があるとも思わない。
1週間後には、今日、夢を見たことすら忘れているだろう。

飛行機雲と同じだ。
すぐに消え去り、そこにあったことも忘れられる。

急に周りが騒がしくなり、俺ははっと我に返った。
どうやら授業が終わったらしい。
腹が減ったな。今日は朝も食べていない。

食堂へ行くと、また偶然、友人と会った。

「よぅ！授業どうだった？」
「あんまり聞いてなかった。なんかやる気がしなくて。」
「朝から走ったのに？」
「…なぁ。」

それから俺たちは他愛無い話をしながら食事を済ませ、午後の授業に向かった。
また教授がボソボソと話していたが、やはり聞く気が起きず、俺はふわふわと眺めているだけだった。
そして俺は、いつの間にか眠ってしまっていた。

誰かが、何か言っている。
何か、ずっと昔から、聞きなれた言葉だ。

俺は、それが自分の名前だと気付き、目を開けた。

「おい。授業終わったぞ。」
「あぁ、ありがと。」
「ホントお疲れだな。」

俺は体を起こし、肺に溜まった空気を吐いた。

「デコ。寝跡ついてる。」
「マジ？」
「お前これからどうする？」
「あぁ……今日は帰るよ。レポートも残ってるし。」
「そっか。じゃあな。」
「おう。また明日。」

空は少し赤みがかっている。
教室には俺以外、誰もいなくなった。
静かな時間が流れている。
ほんのりと暖かい色に染まった教室で、俺はその余韻に浸っていた。

なんだか不思議な風景だった。
見慣れた教室なのに、新鮮な感じがした。
でも多分、それは、俺が気付いてなかっただけなんだろう。
この時間になれば、きっと毎日、この教室はこの色に染まる。
この風景は、昨日も一昨日も、そのずっと前からここにあったんだ。
それに、俺が気付いてなかっただけなんだ。

そして俺は立ち上がり、オレンジ色の教室を後にした。

外に出ると、冷たい空気が寝ぼけた頭を冴えさせた。
見上げると夕焼け色に染まった空に飛行機雲が一筋、奔っている。

あいつは、自分の翼で大気を切り裂き、その巨体を持ち上げて、
自分が通った跡にその印までつけて、人を、運んでいるんだ。

このアスファルトで舗装された道は、俺の足跡なんて残してはくれないけど、
それでも俺は、明日もきっと、この道を歩いているんだろうな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4945r/

ふゆのそらの、ひこうきぐも

2011年10月8日20時32分発行